

仏像と仏師作肖像彫刻における顔造形の比較数量解析

Comparative numerical analysis of facial forms in Buddhist statues and human portraits made by Buddhist sculptors

○小林茂樹¹⁾ 長田典子²⁾
¹⁾ 形相研究所 ²⁾ 関西学院大学
E-mail: kobayashi@keisolabs.com

1. 造形表現の数量解析について

造形作家が行なう造形表現は、以下の過程を経るものと考えられる。

- (1) 想念の過程
- (2) 具象化構想の過程
- (3) 物質的な表象過程

上記(1)と(2)は、作家の内面で生起する事象であって、(1)は民族的、宗教的、あるいは芸術的等の目標を設定する過程、(2)はそれを具体的な形とする構想を立てる過程であり、いずれも形而上の事象である。

(3)は、以上の形而上の事象を物体の形として具現化する過程であり、その成果は物の形、即ち形而下事象として形成される。

見る人(観者)は、作品を見ることだけができ、その視覚刺激から誘発されて、「印象」を生成する。

印象は、観者内部の形而上事象であり、優れた作品ほど、高度な、あるいは強い印象を誘発するものとされている。

しかしながら、作家の想念あるいは具象化の構想が、観者に期待した印象を誘起しない場合もしくは発生した。たとえばゴッホの作品が生前にただ1点しか売れなかったことは、広く知られている。

ゴッホの造形が、その形而下の存在を変化させたなどということは絶対にあり得ないのに、その「理解者」は、没後100余年を経る間に、ほぼゼロから大多数へと、激変した。激変したのは、「みんな」の方だった。

この大変動を惹起した要因は、ほかでもなく、ゴッホの作品自体がもともと保有していた形而下要素であることは、誰も否定できない。

その形而下要素とは、どういうものであろうか。それを数量データとして把握することはできるであろうか。

このような考えをベースとして、私たちは造形の数量化解析を始めている。

2. 仏像顔造形の数量解析について

法隆寺金堂での出来事。本尊の釈迦如来像を見ていた青年は、「あ、中村教夫に似てるよね」と小さく叫んで、友人の同意を求めた。また興福寺阿修羅像は、かつて女優夏目雅子似であると評判になったことがある。これらはいずれも、観者の内に生成した印象に基づく表現であるが、反応は、「あ、そう？」で終る。

しかしながら釈迦本尊のお顔には、そのような印象を誘起した形状的要素があり、阿修羅の顔には、女優に通じる形而下表現があるものと考えられる。

この物的表現とは、どのようなものであろうか。

私たちはこれまで、仏像の横顔造形について、人の横顔形状との比較数量解析を行ってきた。その結果を要約すると、以下のとおりである [1]。

- (1) 仏像の横顔輪郭は、異なる形状を示すものがある。
- (2) 従って数量比較以前にまず、形状に基づく階層分類が必要である。
- (3) 階層分類後のグループについては、数量データによる多変量解析が適用できる。

3. 仏像と肖像の顔造形における比較解析

私たちは今回、仏像の超人性あるいは仏性表現の特徴を理解するために、仏像と仏師作の人物肖像の正面顔を数量的に比較解析した。

まず、慶派仏師の仏像24例と肖像10例について、正面顔の顔高に対する前額高、鼻域高、下顔高、鼻高、耳最大長の比率と、顔最大幅に対する眉毛部幅、外眼角幅、鼻幅、口裂幅の比率を、比較し、次にその他の仏師になる仏像28例と肖像11例について、同じく比較を行なった。

その結果、人物肖像に比較して、仏像正面顔造形は、横顔に見られた異形性はなく、顔部品配置においてのみ異なることが判明した。

文献

- 1.小林他、日本顔学会誌、Vol.9., No.1.,pp31-42, 2009.